

ボランティア事業

2006年度、新しいボランティア制度が始動し、展覧会事業に沿ったボランティア募集を行った。

「コレクション展Ⅰ」及びⅢにおいては、小学4年生対象の鑑賞プログラム「ミュージアム・クルーズ」の核となるボランティア「クルーズ・クルー」が活動した。ボランティア研修では、作品や作家について知識を深めてもらうため、キュレーターによる解説がなされるが、現場においては、ボランティアは作品解説をするのではなく、子どもたちから自由な感想を引き出し、作品の鑑賞力を高める手伝いをする。また、美術館を楽しむきっかけをつくと同時に、公共空間でのマナーも教えなければならない。ボランティアは子どもたちの美術館体験に大きな影響を及ぼす存在となった。このことはボランティア、ボランティア育成側がともに意識するべきだろう。

「artificial heart: 川崎和男展」では、作品と作家について深く知りたいという来館者の要望に答える形で鑑賞ナビゲーターという教育普及プログラムを企画し、ボランティアを募った。川崎和男に師事したデザイナーの橋本洋子氏をコーディネーターに迎え、ボランティア研修を経て、鑑賞者に川崎のデザインを伝える鑑賞活動を行った。会場の数カ所に配置されたボランティアは、鑑賞者とともに作品を見、川崎の考え方や展示コンセプトを織り交ぜながら語り合う形式をとった。ボランティアが各自で勉強し、その成果をメーリングリストや活動申し込み書を通して情報交換するなど、会期中に内容が充実していった。また、同展覧会の子ども対象ワークショップにも関わることで、対象の異なる展覧会関連プログラムに一貫性を持たせることができた。ボランティアにとっては、作品理解と普及活動の大切さを同時に感じとる機会になったのではないだろうか。

奈良美智展「Moonlight Serenade 一月夜曲」では、展覧会の運営にボランティアの存在が必要不可欠な要素として組み込まれていたため、長期間コンスタントに活動できるボランティアを募集した。長期インスタレーションルームを拠点として行われる2つのプログラムのうち、「Pup Patrol」では小学生団体の

ガイドツアーと個人向けの着ぐるみ貸出、「Pup Up the Dog」ではぬいぐるみの中に詰める古着の受付やぬいぐるみ成形作業が主な活動内容であった。長期間に及ぶプログラムであり、鑑賞者と作品をつなぐ立場としてのボランティアの声が運営に反映されることも多かった。看板の改善、着ぐるみの補修、活動記録を収めたアルバム作成などが会期中に提案され、実現した。また、「スタジオカフェ yngm: k」でのイベント補助にも活躍した。

登録制度外のボランティアとしては、金沢ローターアクトクラブによる団体としてのボランティア参加もあった。展示室13の作品《Voyage of the Moon (Resting Moon) / Voyage of the Moon》は、小屋の形状をとり、中に入れる作品であるため、休日には行列ができる状況であった。クラブのメンバーが休日に鑑賞者の誘導を行うことで、会場での混乱を防ぐことができた。当館のボランティアの形態とは異なるが、新しい協力の形となった。

(平林 恵)



「artificial heart: 川崎和男展」における鑑賞ナビゲーターの活動



上 | 「コレクション展Ⅰ」におけるクルーズ・クルーの活動
下 | 奈良美智展ボランティアによる「Pup Up the Dog」成形作業



奈良美智展ボランティアによる「Pup Patrol」着ぐるみ貸出